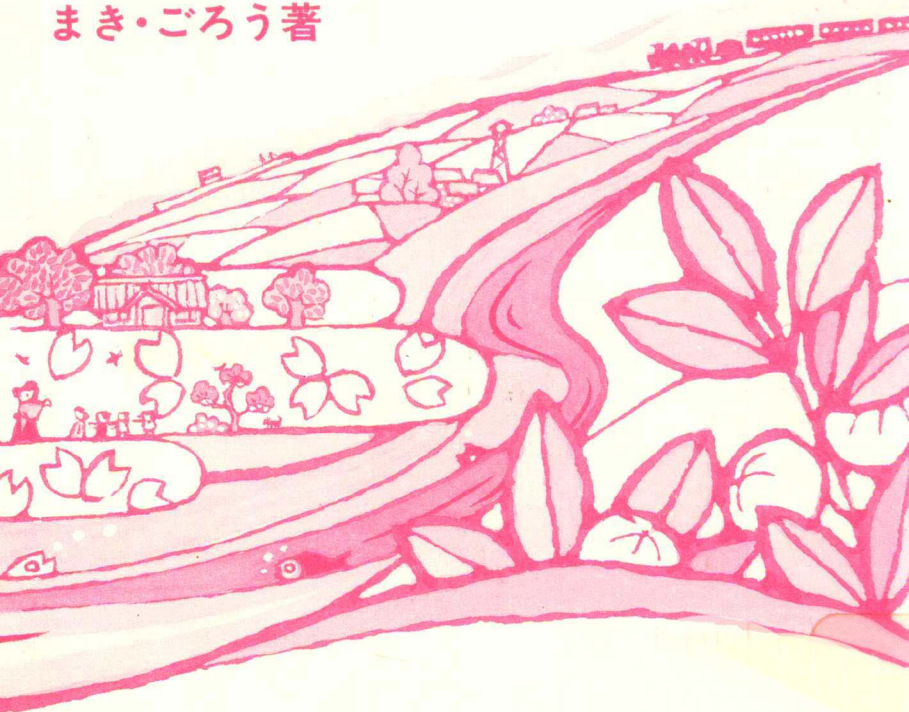


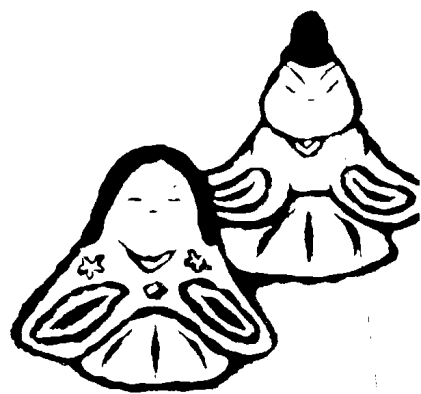
おひなさん

愛よ、紀ノ川の
流れはるかに

まき・ごろう著



ナさん



まき・ごろう 著

著者紹介

まき・ごろう

◎大阪府立北野高校(旧制北野中学)、大阪外国語大学を経て教育の道に入り、幼児から大学生までの各層を指導すること30年の後、独立し、現在、日本表現教育協会理事長・作家・教育評論家・児童文化の指導者として、教師・母親の指導に活躍している。

中学時代母校の創立60周年記念歌を作詞したのを契機として文筆活動を始め、同人誌に「遺伝的運命」「セミプロ学校」などの創作を発表、後、児童演劇・児童文化に興味を持ち、特に幼児から社会人に至るまでの(表現教育)の重要性を強調してきた。

◎著書：『未来っ子を育てるために(表現力に強くなるコツ)』『準備のいらないゲーム100』『幼児のゲーム(自由な遊びから劇遊びまで)』『おれたちゃ高校の野球バカ』など多数。

おヒナさん

昭和59年12月10日 初版

1300円

著者	まき・ごろう
発行者	高田利彦
印刷	株式会社チューエツ
製本	株式会社チューエツ

発行所 株式会社

れい めい しよ ぼう
黎 明 書 房

460 名古屋市中区丸の内3-4-10 大津橋ビル ☎052-962-3045

振替・名古屋8-59001

162 東京営業所・新宿区山吹町354

☎03-268-3470

落丁本・乱丁本はお取替します

© 1984 Printed in Japan

ISBN 4-654-00903-5

にじみ出る女性の魅力

やりたいことをやる女性像

畑ヲヒナさん……これが、この小説の主人公「畑野ヒナ」のモデルです。

この人のことを書きたいと思ったのは、ヲヒナさんが、過去に、日本初の女子校長のひとりとして教育に情熱を燃やした人であるというだけでなく、その生き方が、過去・現在・未来を通じて、多くの女性の参考となる「やりたいことを前向きに△自分の足▽で実現し、しかも女性としての魅力が、その言動からにじみ出てくる内面からの美を備えた人」だったからです。

このように、すばらしい生きかたをしながら、それが群像のひとつとして目立たない存在であった女性こそが、自分の可能性を活かし切れない一般の女性にとってのシンボルとなるべきであり、特に教育の世界で「教師でありながら教育者になれない」人たちにとっての警鐘であると信じるのです。

華やかなマスコミの中で売り出すような派手な自己宣伝的な生きかたをしなかったために埋められていくひとりの「活きた女の姿勢」を、若い女教師はもちろん、家庭のご婦人たちのサンプルとして陽のあたる場に出したい、というのが願いです。

信頼に応じる行動

「自分は何のために生きているのか？ 自分という存在は何か？ をつねに追い求めた生涯でしたが、それが自己中心ではなく、ひとりでも多くの人々に「愛」をという、身についた信念からのもので、したがって「頼まれたらイヤとは言えぬ」性格から、頼まれたら頼まれがいのあるようにそれを実現することを考え、それに沿って道を歩んだことが、その足跡から読みとることができます。

あくまでも女として

仕事に生きる……というのと、半ば男性化した人を想像しがちですが、女として優雅さと情熱は、人に劣らず持つていて、その「女の魅力」は、ご主人が選りに選った妻女であつたことから知ることができるとでしょう。「女の特質」を自認し、その中で自由に動いた人であるからこそ、周囲の人々からも高く評価され親しまれてきたのであると思います。

自分で選んだ「やりたいことをやる」環境

やりたいが、自分の才能を活かす環境に置かれない……、女性にはこの嘆きがつきまとうことが多いようです。特に、将来を考えず、ただ好きだからというだけの相手と家庭を持ったがゆえに、年とともにマンネリとストレスに悩む人も数知れずあるようです。「おヒナさん」はその点、自分に適した仕事と、それを永続できる環境を自分で選びました。彼女の初志を貫くためには、この人を置いてはならないというご主人を選んだのです。そして、男としての価値を少しも損ずることなくして彼女の生きる道に協力してきた「畑野誠治」の人柄も忘れることのできない存在として強調したいのです。

紀ノ川の源から大海に向って注いでいく流れのように、豊かにひろがっていくこの「人間愛」のものがたりが、あなたの、これからの「活き方」に少しでも示唆することがありましたら、大いに幸とするとことです。

昭和五十九年十月二十一日

まき・ごろう

もくじ

*にじみ出る女性の魅力——1

第1章 愛って、一体何なのだろう——7

人にはその人の生きかたがある。たとえ裏切られても

その人のために精いっぱいつくすのが「愛」では……。

第2章 子どもたちへの愛に生きて ————— 49

疲れを知らず飛びまわる子どもの姿がヒナの明日への道を励ましてくれるのだった。

第3章 この人が、三浦ヒナ先生か ————— 95

しとやかでしかも、きりつとしまった女教師を見た時、「知性のある女」は、この中から選ぶにかぎると誠治は思った。…

第4章 にわかに過ぐる夏の雨 ————— 125

「結婚とは……」、一歩踏み出したら、前向きにしか考えないヒナの個性は、いそがしく働きはじめた。

第5章 女やったら、別なんやろか ————— 161

デモクラシーから軍国調へ……そして戦争は終った。小さな家々の灯がともしはじめた。

第6章 紀ノ川のほとりの小学校 ————— 189

それぞれ人には特質がある。女の校長は、女だから出来る事をやらねば……と、ヒナは気づいた。

第7章 とめても止まらぬ人 ————— 216

校長というのは肩書、試験に通るのは実力。ヒナは人が止めるのを振り切って栄養師試験に挑んだ。

第8章

愛の足跡 あしあと

252

一生を青春で過すやなんて……幸せやなあ……。いい終
わるとヒナは……。愛の足跡を人々の心にとどめて……。

さしえ・やまだ みどり

第1章 愛って、一体何なのだろう

城の石垣に立つと、和泉山脈が目のあたりに見える。

茂った木立ちを抜けて吹上げてくる北西の風が、日射をやわらげて快く髪をなでて通る。

「ああ、ええ気持……。」

グーッと伸びをして一息つくと、ヒナは、ベンチに腰を下ろした。

南海電鉄の鉄橋の下を流れる紀ノ川が、きらりきらりと光るのを遠くに見て、ヒナは、その川上の故郷を思った。

弘法大師で名高い高野山のふもと、橋本から紀見峠へ約三キロの細川、そこから師範の女子寮へ入

つて三年目になる。

関東大震災の騒ぎもようやく消え、世間には自由思想がひろがり、閉じこめられた女性の解放を歌う「籠の鳥」が流行していた。

風潮はそうであつたが、教師としての徳性を養う師範の規則は、厳格そのものであつた。

ヒナたちが自由を味わえるのは、休日の二時間の外出であつた。その許可証をふところに、門衛の前を通り過ぎると、みんな三々五々に、ある者は城前の「おそばや」に入り、「氷や」に行き、ぶらくり町を歩いて「電気館」の活動写真の看板を見て、楽しむ者もあつた。館内へ入るのは禁止されていたのである。

ヒナには、他の友だちのそのような「気休め」が気休めにはならなかつた。門を出るとすぐ県庁前の植野書店へとびこんで、そこで新しい本を求め、この公園内のすがすがしい木陰で読書することが無上の楽しみとなつていた。

へうさぎ追ひし　かの山……

なんとなく口にでくるメロディをひとときなつかしむと、ヒナはすぐ、まるで恋人にでも会うように眼を輝かせながら、いま買ってきたばかりの本を急いで開いた。

その時、

「いやいやいや……いやよ。」

と、かん高いが、押し殺すような女のさけび声が聞えた。

やや、離れたケヤキの木陰からだった。

ふと、その方に目をやったヒナは、木の下の草むらから、はみ出ている袴はかまの色を見てドキリとした。海老茶の学生袴、それは、まぎれもなく師範の女子生徒のものだった。その向こうに、ヒザをかかえている男の制服が並んでいた。

ヒナは立上がつて近づいた。ほんとうに師範の生徒かどうかを確かめたかった。

「見誤りであればよい」そういう祈りもむなしく、束ねた髪型も着物のがらも、全く師範生のそれであつた。

さらに、ヒナの眼をみはらせたのは、その女が同級生の砂川紀代すながわきよだったことである。

紀代には慕う男がいた。県立工業の生徒ということは聞いていた。男といえば、兄とも肩を並べて歩くことを禁じられている女子寮のきびしい眼を避けながら会っている彼のことを、紀代はヒナにだけ打明けていた。

ヒナは許しがたいことだと思った。何の目的でここへ来ているのか、故郷の恩師は何を期待して彼女を推せんしたのか、その幹のぐらつくような態度は、ヒナには考えられない脱落である。

「あなたは国の費用で勉強させてもらっているのよ。忘れたの！」

そういつて、紀代をなじった。

しかも、相手は県工生なのだ。県工生といえば、パンカラで品のないのが多いという印象が強かった。

夏になると、生徒たちは、荒浜^{あらはま}へ海水浴に行く。北の方は女子、南の方は男子と分けられて、更衣のためのテントが張つてあつた。北の端は市立高等女学校で、次が県立高等女学校、男との境が師範の女子部、そのすぐ南が県立工業の男子生徒になつていたから、水着を脱ぐ女子の姿が、潮風でテントがゆれるたびに、ちらちらと見える。それを楽しむかのように好奇の眼で、こちらを見ているのが県工の学生だつた。そして、帰途に、すれ違いざまに野卑な言葉をかけながら高笑いするのが、身ぶるいするほどイヤだつた。それにくらべると、師範の男子生徒は端正そのものだつた。

運動場をへだてた向こうに男子寮があつたが、体操着の女子を窓からのぞく者もなかつたし、祝日の行事で、日前宮^{にちぎんぐう}へ参拝する行列が道ですれちがつても、そ知らぬ顔で前を見て歩いていた。

ヒナは、それが目的に打込んでいる男たちだと思つていた。

だから紀代が県工生と、……と聞いた時、

「こともあろうに……。」

と、あきれと怒りがこみ上げてくるのを、おさえきれなかつた。

だが、ヒナには、頼られるとつっぱなせない、「窮鳥をふところに入れた獵師」の性格があつた。そ

して、しだいに同情し、かばうような立場に立たされていた。

いま、その二人の寄り添っている場を見て、ヒナのからだに正義と仁侠の血が交互にかけめぐった。複雑な思いを胸にたたんで、そつと背を向けようとした時、また紀代の声が大きくなった。

「いやいや、もつともつといっしょにいたいんよ。」

「けど、門限まであと十分くらいやろ。」

「ええわして、罰受けるのは覚悟や。」

「あかん、いつまでこうしててもおんなじや、僕のために規則破らしたら、大阪へ帰っても気になつて shouldn't。」

「でも、あんた、帰つてしもうたら……、もうこれで……。いやや、そんなん……。」

ヒナはハツとした。

紀代は一時半に外出した。いま三時二十分を過ぎようとしている。紀代の門限は、あと十分足らずしかない。

ヒナは振返つて、足早やに二人の後ろに近づいた。男は立ち上がろうとしていた。紀代がその手を引止めて、かぶりを振っていた。

「あかなしよ、砂川さん。」

ハツと振返つた紀代は、はじかれたように立ち上がると、

「三浦さん！」

といったまま、わなわなと頬をひきつらせながら、しばらくヒナを見つめていた。

「時間には帰らなあかんよ。」

ヒナはきびしい眼でいったが、紀代はそのことばを耳にしないで、

「立ち聞きしてたのね。」

と、ヒナを責めるようにいった。

「そんなことせえへな、聞こえてきたんよ。」

「……………」

「私、本読もうとしてたから、誰かわからなかったんよ。けど、あんたとわかって、びっくりしたわ。」

「ごめん……。」

紀代は急にガクリと肩を落した。そして、哀願の情をこめて、ヒナにすぎると、

「ね、聞いて、お願い……。」

と、ヒナの腕をゆすった。

隣の生徒は、向こうをむいて、じっと身じろぎもなかった。

「あの人やね、いつもいうてる。」

「そ、そうや……、あの人、もう、会われへんて……。」

「えっ。」

なんだ、そんな事かとヒナは腹の中で笑った。紀代はふられたのだ。よくある話じゃないかと思つた。

「あんたねえ、私ら、何のために和歌山へ来ているのか、わかつてるの。」

「わかつてる、わかつてるわ、そんなこと。」

「だつたら……。」

たかが男との遊びに夢中になつて自分の道を外してしまうなんて……。教師になることしか頭にな
いヒナには、仲よしの紀代が墮落していく姿に耐えられなかった。

「ちがうんや……、あの人……死ぬかも知れないんや……。」

「死ぬ？……いつたいそれ……。」

ヒナは、ふと紀代の表情にただならぬものを感じた。そして話を聞く気になった。

その学生——日角清は、胸を病んでいた。医薬のまだ高度でなかった時代、結核は不治とされてい
たころである。

彼は、大阪の工業学校を受験した。筆記試験では優秀な成績をとりながら身体検査ではねられた。
そんな虚弱なからだではあったが、どうしても学校へ行きたかった。そして、和歌山の県工へ入学し

た。ここでは、あまりに優秀な成績がからだのハンディキャップを超えて合格となったのだ。しかし、勉学の激しさと病が重くなるのは比例していた。その夏休み、母は彼を白浜の温泉へ療養に連れていった。その船の中で出会ったのが帰郷する紀代であつた。

紀代は、彼の鋭い才能に魅力を感じた。そして、そのすぐれない健康に同情を寄せた。この人を支えるのは自分しかないと思ひはじめていた。しかし、清をむしばむ病は、とうとう学業を断念して長期療養の施設へ入らねばならぬまでに追いやっていた。

別れて再び会える可能性の少ない別れが来た。紀代は、すべてを忘れて思いつめていた。

ヒナは時計を見た。三時半には、あと四分しかなかった。

「砂川さん、あんたの許可証お出し。」

「え……。」

「はよ……。これ、私のや、五時までである。週番何とかしとくよつて、きつと、きつと帰るんやで、私を困らしたらあかなしよッ……。」

「三浦さん……。」

あつけにとられている紀代をしり目に、ヒナは城の道をかけおりていた。とつさにひらめいたことだった。